倉敷市は、2020年7月に「SDGs未来都市」に選定されました

倉敷市・高梁川流域の SDGs がわかる本

倉敷市

みらいを、みんなで Sustainable Development Goals SDGs 倉敷市・高梁川流域

エスディージーズ
SDGs【Sustainable Development Goals】とは？

貧困、紛争、気候変動、感染症。人類は多くの課題に直面し、このままではこの世界で安定して暮らし続けることができなくなると心配されています。そんな危機感から、「持続可能な世界」を実現するために、国際連合（国連）で世界中の人々が話し合って2030年までに達成すべき目標を立てました。それが「SDGs（持続可能な開発目標）」です。様々な社会の課題とSDGsとのつながりを知り、「持続可能な世界を築くためには、何をしたら良いだろう？」「SDGsの達成のために、自分はどんなことができるだろう？」と一人ひとり、みんなが考えて、行動することが大切です。

目標1
貧困をなくそう

地球上のあらゆる形の貧困をなくそう

目標2
飢餓をゼロに

飢えをなくし、だれもが栄養のある食糧を十分に手に入れられるよう、地球の環境を守り続けながら農業を進めよう

目標3
すべての人に健康と福祉を

だれもが健康で幸せな生活を送れるようにしよう

目標4
質の高い教育をみんなに

だれもが公平に、良い教育を受けられるように、また一生に渡って学習できる機会を広めよう

目標5
ジェンダー平等を実現しよう

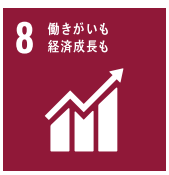
男女平等を実現し、すべての女性と女の子の能力を伸ばし可能性を広げよう

目標6
安全な水とトイレを世界中に

だれもが安全な水とトイレを利用できるようにし、自分たちでずっと管理していけるようにしよう

目標7
エネルギーをみんなにそしてクリーンに

すべての人が、安くて安全で現代的なエネルギーをずっと利用できるようにしよう



目標8
働きがいも経済成長も

みんなの生活を良くする安定した経済成長を進め、だれもが人間らしく生産的な仕事ができる社会を作ろう

目標9
産業と技術革新の基盤をつくろう

災害に強いインフラを整え、新しい技術を開発し、みんなに役立つ安定した産業化を進めよう

目標10
人や国の不平等をなくそう

世界中から不平等を減らそう

目標11
住み続けられるまちづくりを

だれもがずっと安全に暮らせて、
災害にも強いまちをつくろう

目標12
つくる責任つかう責任

生産者も消費者も、地球の環境と人々の健康を
守れるよう、責任ある行動をとろう

目標13
気候変動に具体的な対策を

気候変動から地球を守るために、
今すぐ行動を起こそう

目標14
海の豊かさを守ろう

海の資源を守り、大切に使おう

目標15
陸の豊かさも守ろう

陸の豊かさを守り、砂漠化を防いで、多様な生物が
生きられるように大切に使おう

目標16
平和と公正をすべての人に

平和でだれもが受け入れられ、
すべての人が法や制度で守られる社会をつくろう

目標17
パートナーシップで目標を達成しよう

世界のすべての人がみんなで協力しあい、
これらの目標を達成しよう

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

出典・参考：日本ユニセフ協会（SDGs CLUB）
https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/

コラム 「ゴール」と「ターゲット」の考え方

17の目標、169のターゲットがある

SDGsには17の目標（ゴール）があり、一つひとつにターゲットが設定されています。ターゲットは目標を達成するために必要な、より具体的な目標のことを指します。

例えば目標1【貧困をなくそう】には「2030年までに、世界中で『極度に貧しい』暮らしをしている人をなくす」「2030年までに、それぞれの国の基準で『貧しい』とされる男性、女性、子どもの割合を少なくとも半分減らす」など、5つのターゲットが設定され、その達成のために「貧しさをなくすための計画や政策を実行していけるよう、いろいろな方法で資金をたくさん集める」といった活動の方法が示されています。

倉敷市・高梁川流域におけるSDGsへの

case1

町家を再生し、美観地区の情景を守る

SDGs×町家再生　**NPO法人 倉敷町家トラスト**　倉敷市東町

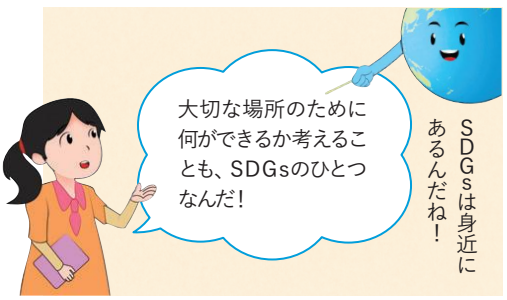
町家トラストが保全を手がけた町家（倉敷美観地区）

放置された町家を再生、活用

江戸幕府の直轄地、いわゆる天領として栄えた倉敷には、商人や職人が暮らした町家や土蔵が数多く存在し、当時の面影を残しています。その一帯は「倉敷美観地区」として知られ、多くの観光客を呼ぶ倉敷市のシンボルエリアです。その一方で長年放置されている町家もあり、課題となっています。NPO法人 倉敷町家トラストは、町家の修復、再生、利活用を通じた景観保全などを目的に2006年に設立。代表理事の中村泰典さんは美観地区で生まれ育ち、今も暮らしています。

先人の努力を引き継ぎ、美観を守る

「1968年に『倉敷市伝統美観保存条例』が施行されるまでも、それ以降も、美観地区はもちろん、地元の木材を使って地元の大工が建てた町家を大切に残そうと、先人は努力してきました。SDGsが定着する前から持続可能な取り組みが行われていたと、トラストを設立して気付きました」と話す中村さん。2007年にはトラストとして初の町家再生物件「御坂（おんさか）の家」が完成。木造平屋建ての柱や梁を残しつつ、ゲストハウスに再生させました。先日再生した町家には子ども支援の団体が事務所を構え、中村さんはその活動から、子どもの教育や貧困問題など未知の世界を学ぶとともに、SDGsの広がりも感じとっています。



その場所が持つ“夢”に耳をかたむける

「愛着のある場所が、今後どうあってほしいかを考えると、SDGsは身近になる」といいます。「そのためには、この場所に一番ふさわしい“夢”は何かと、場所の“声”に耳を澄ませて考えること。私が暮らす美観地区は、新しいビルが次々建つ場所ではありません。美しい景観が守られ続けることこそ“夢”だと思っています。夢の実現を手伝おうと思えば、やるべきことがわかります」

町家でインタビューに答える中村さん

町家トラストの活動は、過去の街並みを保存するというより、まちの未来の姿をみがき続けている感覚だといいます。

「条例施行を経て、倉敷の人は今に至るまで絶えずまちをみがき続けてきました。ですから20年、30年後も、美観地区はきっと変わらないと想像できます。つまり未来のまちに、私たちは今すでに足を踏み入れているともいえます」

これからも、町家に新たな命と役割をもたらし、愛され続け、住み続けられるまちづくりを進めていきます。

case2

竹を通じ、循環型社会をつくっていく

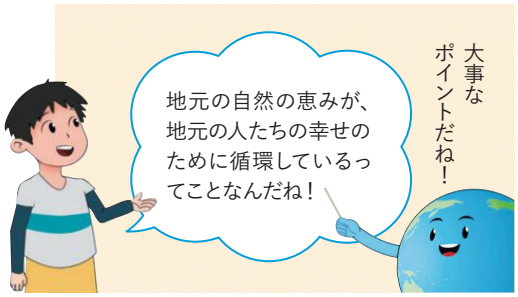
SDGs× 森林資源　株式会社テオリ　倉敷市真備町

地元の竹を使ったモダンな家具

自然の恵みを最大限に活用

倉敷市真備町はタケノコの一大産地。豊かな竹林が広がります。この地に本社を構える株式会社テオリは、自然の恵みである竹を使った家具を 1998 年から製造しています。「企業活動を通じて、竹素材を有効活用した『竹の循環型社会』をつくっています」と代表取締役の中山正明さんは話します。

地元の竹林から「孟宗竹（もうそうちく）」を切り出して自社工場で加工。やわらかな風合いと加工のしやすさを備えた集成材となり、美しくモダンな家具に生まれ変わります。加工の過程で出た竹の表皮はオイル塗料や浴用化粧品、枝葉は土壌改良剤の原料にするなど、自然の恵みは余すところなく利用されます。



パイオニアとして SDGsのモデルを示す

伐採と同時に竹林の整備を行い、竹の生育に適した状態を保つことも忘れません。最近は、地元の人が持ち込んだ竹の買い取りにも力を入れています。「竹という持続可能な素材で商品を開発・製造することで地元経済が動きます。土壌改良剤として土にも還ります。真備町が竹の循環を通じて潤うまちになるよう貢献したいです。この思いは、竹での家具づくりを始めた 23 年前から変わっていません」

SDGs という考え方が定着する以前から、成長と共に循環型社会や地元の幸福までを見据えて企業経営を続けてきた中山さんは、社員一人ひとりにこう呼びかけているといいます。「SDGs のパイオニアとして、この事業が世の中のモデルとなるよう、今後も自信をもって行動していこう」。現在では、取り引き先などから興味をもって質問されることも多いそうです。

自社ショールームで語る中山さん

取り組むハードルは高くない

2018 年 7 月の西日本豪雨では甚大な被害を受け、事業を継続できるかどうかの瀬戸際まで追い込まれました。そんなときも、地元をはじめたくさんの人たちの温かい支援に支えられました。

高梁川流域の企業が集まり、年に一度行われる展示即売会では、様々な人や企業が、川によってつながっていることを実感できるといいます。常に未来を見つめる中山さんの姿は、SDGsに取り組むことへのハードルは決して高くないことを教えてくれます。

倉敷市・高梁川流域におけるSDGsへの

case3

地域の縁で、新しい価値を持つ産業を

SDGs× 地場産業　**株式会社丸五**

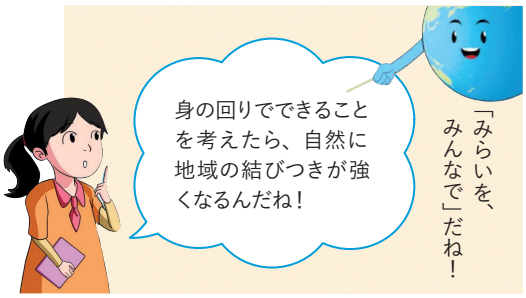
倉敷市茶屋町

丸五の社内には様々な活動の様子が掲示されている

繊維技術に新たな発想

倉敷市と周辺の地域は、江戸時代から繊維産業が発達しました。干拓地で塩分に強い綿花を栽培したこと、染色作業や機械を動かすために必要な水が、高梁川から豊富に確保できたことが背景にあります。裁断、縫製、洗い、加工などの高い技術を生かし、製品開発が続けられています。

1919年に地下足袋メーカーとして創立した株式会社丸五は、2015年、100年続く技術を生かした足袋型シューズ「たびりら」を発売しました。同社の髙橋理恵子さんは「倉敷の老舗の帆布や井原のデニムを生地に使うなど、近隣の企業とコラボレーションすることで、新商品が生まれるいいサイクルができています。地域のご縁を生かし、新たな価値を創造していきたい」と話します。



考え方を転換 SDGsを通して親交深まる

SDGsプロジェクトチームの社員たち

足袋型シューズの開発には、自分の体や心にいいことは、地球にも優しいことなのでは、との思いが背景にあります。「安いほうがいい」「便利が一番」といった考え方を転換。“地下足袋ライフ”は、SDGsのゴールのひとつ「すべての人に健康と福祉を」につながる取り組みです。2018年8月には、女性だけでSDGsのプロジェクトチームを社内に結成。蜂谷幸子さんは「年齢も部署もさまざま。同じ目標に向きあうきっかけになりました」と振り返ります。SDGs先進企業や団体と協働して、SDGsのカードゲームを体験したり、ワークショップも開講。明比恵莉菜さんは「SDGsの言葉は随分と浸透してきました。社内外との親交を深める点でも、SDGsは大きな効果を上げています」と話します。

日々の仕事を世界の課題につなぐ

同社は中期経営計画の策定にあたり、企業としての目標と日々の仕事をSDGsのゴールと結びつけることを始めました。自分たちの仕事と世界の課題はつながっていると考えたからです。みんなが笑顔になれるワークライフバランスの実現、オープンイノベーションをみんなで分かち合う豊かさの実現、などの5つの目標を作りました。

浦島麻彩さんは「SDGsを通して地域とつながりを持てることには大きな価値があります。大がかりに考えすぎず、自分の身の回りでできることを考え、行動を起こすことがSDGsには大切だと思っています」と意欲を語りました。

case4

SDGsが生徒の自信や学校の伝統に

SDGs×教育 **倉敷市立精思高等学校**

倉敷市八王寺町

売り上げの全額を被災地に寄付した「ナイトバザー」

アワード受賞で生徒に自信

倉敷市立精思高等学校は、普通科と商業科の生徒が学ぶ定時制の高校。2011年から自然災害の被災者支援を中心に、継続的かつ積極的な活動を行っています。

その取り組みは高く評価され、岡山のSDGsの推進において、優れた取り組みを行う団体を表彰する「おかやま SDGs アワード」（2020 年度創設）を受賞しました。アワードの受賞は今後の活動への大きな励みになっています。「活動を通じて様々な企業とかかわり、意見の伝え方や円滑なコミュニケーションなど、これから社会で必要なことをたくさん学べました。後輩にも引き継いでいきたいです」と宗元佳凛さんが振り返るように、生徒の自信や学校の伝統にもつながっています。

被災地支援から貧困対策まで

精思高校のSDGs活動のきっかけは 2011 年の東日本大震災。生徒から「被災地のために、何かサポートがしたい」との声があがり、街頭募金やバザーで得たお金の寄付から始めました。「全国の企業に電話をかけ、趣旨に賛同いただき、無償で提供いただいた商品をバザーで販売しました」と赤島永遠さん。地元の特性を生かしたアイデアも光ります。市内の児島地区は全国有数のジーンズ製造地。製造の際に出たジーンズの端切れを被災地に送り、被災者にバッグなどに加工してもらった上で販売。その売り上げを寄付するなど、被災地の就労支援や循環型社会づくりにも取り組みました。バザーの収益でカンボジアへ鉄棒を寄付したほか、最近では食品ロス商品を無償で貧困家庭へ配布するなど、子どもの貧困に着目した取り組みも盛んです。

SDGsに取り組む生徒たち

SDGsのつながりの広さ

2018年、西日本豪雨災害に見舞われた際には、がれき処理や、被災者の思い出が詰まった写真を洗浄するなどの支援を行いました。石橋杏さんは「被災した生徒は私たちの学校にも在籍しています。災害は他人事ではありません」と話します。

今や海外へも目を向け、精思高校のSDGs活動は多岐にわたります。朝原聖月さんは「何をすればいいか最初は分かりませんでしたが、いざ始めてみると様々なことが SDGs につながると知りました。一人ひとりが地球のことを考えることが、第一歩だと思います」と力強く締めくくりました。

大原あかね 公益財団法人 大原美術館 理事長

おおはら・あかね●1991年 一橋大学経済学部卒業。信託銀行系の金融工学に関する研究所勤務などを経て2000年公益財団法人大原美術館理事。2011年専務理事。2016年7月から理事長。倉敷紡績創業家である大原家の10代目にあたる。「みんなのマイミュージアム」をスローガンに、広く開かれた美術館経営を目指している。

みんなで手を取り合い 新しい発想で未来を創造

原点は「高梁川流域連盟」の趣意書に現れた先見性

伊東　倉敷市は2020年に、国からSDGs未来都市に選定されましたが、選定理由の一つとして、倉敷市が高梁川流域の6市3町とともに推進する持続可能な流域づくりが挙げられます。

その原点（出発点）となるのが、1954年に大原總一郎様（大原あかね氏の祖父）が提唱し、流域の官民で設立した「高梁川流域連盟」で、現在も文化向上の取り組み等を行っています。そして 2015 年には、さらに幅広い分野で連携を強化するため、全国に先駆けて地方自治法に基づく「高梁川流域連携中枢都市圏」を形成しました。

大原　總一郎は、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の委員でもありました。高梁川流域連盟の趣意書を読み返してみると「ユネスコが世界平和を唱えているが、まずは自分たちの身の回りでできることから始めよう」という趣旨の言葉から始まります。まずは地域でやろうという発想です。現在のSDGsの考えを先取りしていたようで、高梁川流域ならではのSDGsの取り組みが進むかと思うとワクワクします。

先人から受け継いできた持続可能なまちづくり

伊東　2016年にはG7（主要7カ国）教育大臣会合が倉敷市で開かれました。 開催地の決定において

語らい座大原本邸にて

は豊かな歴史と、繊維をはじめとする産業基盤を背景に、教育・文化を大切にした地域づくりが進んできたことが評価されました。地域でこれまで暮らしてきた人々の考えを連綿と受け継いで今があります。

市としても、2021年から始まる市の第七次総合計画は、一つひとつの施策を SDGsと結びつけ、常に意識できるようにしていきます。

大原　大原孫三郎は農家や工場労働者などの福祉向上を目的に、さまざまな研究所や病院を創設しました。

当時、SDGsという言葉はまだなかったけれど、そうした遺伝子がいっぱい散らばっているのがこの地域。当たり前にやってきたことが、実は世界の課題解決につながっていることもあります。歴史と文化が豊かなこの流域は、SDGsのゴールを目指す鍵がたくさん。まちの人たちが自分なりのやり方で未来を切り拓いていける素地があるのではないでしょうか。

伊東香織 倉敷市長

いとう・かおり●1990年東京大学法学部卒業。同年郵政省採用。1993年米国ハーバード大学ロースクール修士課程修了。栃木県日光郵便局長、総理府国際平和協力本部事務局参事官補佐、総務省インターネット戦略企画室長補佐、倉敷市総務局長、倉敷市収入役、総務省国際部多国間経済室長を経て、2008年倉敷市長就任。現在4期目。

豊かな歴史と文化を生かし 一人ひとりの幸せを実現

経験を活かし、さらに高梁川を恵みの川に

伊東　倉敷市は高梁川の下流にあたりますので、上流からの恵みを受けていることになります。流域では一斉クリーン作戦が毎年行われるなど、川を大切にする気持ちが根付いているのはうれしいですね。一方で、2018年の西日本豪雨では大きな被害を受けました。いま災害の状況をデータ化し、経験と教訓を流域全体、そして全国で共有、活用できるように進めています。こうした経験を共有し災害に強いまちづくりを進めていくことはSDGsの観点から大きなテーマだと感じています。

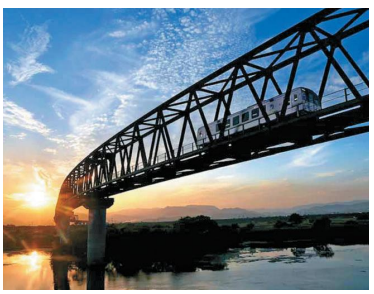
大原　安心があってこその教育、文化ですし、経済発展の基礎になります。岡山県は川が多く、地域の強さの源になっています。高梁川流域では60年前から、官と民が一緒になってリレー大会や合唱大会などの活動も続けてきました。SDGsをキーワードにさらにつながりが深まり、高梁川がさらなる恵みの川になってくれればと願っています。

みんなでかなえる 誰もが主役になれる地域

大原　SDGsは未来の世代のためのものだと考えています。これまでは取り残された人がいたかもしれないですが、テクノロジーの発展もあって、今は一人ひとりの幸せを実現できる時代になってきたと感じています。

　SDGsの「誰一人取り残さない」の原則の通り、すべての人が主役になってほしいですね。次の世代の人たちが新しい発想でこの流域を発展させることを楽しみにしています。

伊東　いま新型コロナウイルスの影響もあり、東京への一極集中を見直し、故郷での暮らしを検討する人が増えています。倉敷市と高梁川流域は本当に素晴らしいところです。この地域で多くの人が暮らし、訪れることで交流が生まれ、新しい何かが生み出されていきます。若い世代にはこの地域の文化、芸術、歴史にふれ、どのように発展してきたかを知ってもらうことで、もっとまちを好きになってもらえると思います。2030年、さらにその先を見据えて、みんなで地域の力を伸ばしていきたいと考えています。



提供 朝日新聞社

メモ

メモ

倉敷市と高梁川流域圏の連携

岡山県西部において高梁川の恵みを共有する、新見市、高梁市、総社市、早島町、倉敷市、矢掛町、井原市、浅口市、里庄町、笠岡市の7市3町。倉敷市の実業家、大原總一郎氏の提唱により1954年に設立した「高梁川流域連盟」の理念に添い、流域一体となってSDGsの達成に取り組んでいます。

①SDGsってなんだろう？基礎がわかる入門編動画
https://youtu.be/J809W9_1WLA?si=GigPgCVLrUt3dq1_

②倉敷市・高梁川流域の取り組みを紹介する実践動画
https://www.youtube.com/watch?v=Gg9bAqdjfxY

③倉敷市長と（公財）大原美術館・大原あかね理事長による対談動画
https://www.youtube.com/watch?v=9tt430zxIBo

高梁川流域SDGsポータルサイト
https://www.goodcity.jp/kurashiki.takahashiriver

倉敷市企画経営室
tel: 086-426-3055
E-mail : plnpol@city.kurashiki.okayama.jp